
IS—BADAss SOUL

YH15-DRONE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISIBADASS SOUL

【Nコード】

N0735Z

【作者名】

YH15 - DRONE

【あらすじ】

叢雲重蔵が織り成す奇想園STORYここに開幕。

聖なる夜の記憶（前書き）

連載物をやろうと決意したは良いが更新が不定期になりそうである。
む。

聖なる夜の記憶

カラフルな色彩のカーペットには沢山のオモチャが盛大に散らばっており、その散らかった中心に一人の男の子が画用紙にクレヨンで何か絵を描いていた。丁度、家の外にも降り注いでいる白い雪の中を赤い服に帽子、長い立派な白髭の老人がトナカイの引くソリに乗り笑顔で白い袋から赤い長靴下を枕元に準備した子供達に箱プレゼンを渡す絵は今日がクリスマスだと気付かせた。

男の子は一通り出来の良い絵なのを満足したようで、使ったクレヨン達によって汚れた手を洗おうと立つと自分の足下の床から何か鈍い大きな音と陶器物とが、盛大に割れる様な音がする。一階のリビングからだろうか？

背伸びをして少し高い位置にあるドアノブを掴んで回す。灯りで輝く冷たいフローリングを急ぎ、階段を二段飛ばしで降りる。

リビングのドアノブに手を掛け——リビングのドアの曇り硝子になにか赤いモノが付いている様にちらと見えたが…それは重要では無い——先程と同じようにドアを開ける。

そこには優しい微笑みを見せてくれる両親だった者達が、赤い池の中で手を絡ませ仰向けのようになって居た。

ジュウ、お父さん達は今から準備するから…ん？良い子に部屋で待

ってたらサンタさんが来てくれるかって？ハハ！もちろん！

ジウクンってばそんなにそわそわしてクリスマスは逃げはしないわよ？ふふっ。

——パパ、ママ…？

ドアの向こうの壮絶な光景はなんなのだろうか？親が赤い水を出しながら…水？違うこれは血だ。アスファルトで転け滑らかな鋭角の凸凹とした足場に膝の皮膚を削り取られ、内装の肉が破ける。裂けた部分から出る鼻にツク臭い。あの時とはケースが違うがパパやママにできた穴からは血が出ている…だが不思議だパパとママは痛がる様子を見せない、なんでだろう？六歳の童にどうすれば愛した者が何も喋らぬ骸と化したと解せようか？

「イひひひひひヒヒ！！」

下品は高笑いと脇腹に重く鋭い痛みが走る。横腹を蹴りつけられ、二回瞬きをし、床から数十cmの飛行を終え壁に激突。頭を打ち付け視界が歪み、赤く染る。

その中で見たモノは……サンタ？

白く血の通っていないその笑顔は仮面なのだろう青い瞳の典型的なサンタのデザイン血塗られた大きな凶器、それすらも見えなくなるほど視界は不安定になっていく——最後、重い目蓋を閉じ俺はその惨劇から意識を遠ざけて行った。

なぜ？…俺たちなんだ？…くそつたれが…。

「…………ぬう」

先程までの光景が鮮明且つ夢とは言え、頭を抑えるもちろん血なんかは出ていないあるのは太くぶ厚い手が、開閉しているだけ。

自分好みのシックな部屋をグルリと見渡す、うむ、自分は現実へ目覚めたようだ。

机の時計に目をやるとホロデジタル時計の表記は六時半…まだ残る眠たさで惚けていると部屋のドアを叩く音が、入るよう伝えたと何時もより起きるのを遅く思った初老の使用人だった、すぐ行くと伝えたと彼は会釈し退いた。スライド式のクローゼットの車輪の進み具合に文句を言いつつ、学生服を着て身形を確認…広い額に尖った髪型、細く鋭い眼光は何時も何かを睨んでいる様でさらに2mジャストの身長は鍛え築き上げた肉の鎧で構成されている…胸筋と上腕を震わせ、まだまだだなと…！と、学生服に着替え始める。

部屋を出て赤いカーペットに遠い嫌悪感を抱きながら廊下を歩く…歩きながらふと思いつく親を殺めたあのサンタは自分達一家を襲撃した後他の住民達をも多数殺害そのご自らの喉を凶器であるコンバットナイフで自らの喉を刺突、死亡…これがあの時の、血の聖夜の結末。病室のベットの上で両親を喪ったこと、新しい家族の元で暮らす事…ぼーっとした虚ろな頭を通して行く言葉達は忌々しい他無く其れを遮断するかのように眠くなる。

しかし、眠ったら眠ったで、あの惨劇が待っていたと言わんばかりにリプレイされる…。

この現象は誰にも話した事が無い、何故か？何も感じないからだ、こう言ったトラウマ的夢は見る者はストレスを抱え過ぎ、普通の人間を失わせてしまいが自分はこれを視て何とも思わないのだ…も

しかしたら俺もあのサンタの様にいつか、突然に狂うのだろうか？

ハッ——なにを言ってる？寝言は寝て言うもんだろっが。

目前の両開きの扉を開けると俺は沢山の日光に包まれた。

硝子ばりの天上からは晴空と日光がそれから連なった頭上のシャンデリアとバカに長いテーブルとフローリングの床を内装すること、我が家の主人の趣味で作った謎の大型ホールである。何でも

『あん？年会の時にドンチャンする時には我が家の方がテンションが上がるから造った文句あつかいBOY？』などと仰る。

「おはようございます。坊ちゃん」

「おはよう、朱さん」

先程の使用人とは違うがこの家の管理をしてくださっている人だ、管理しているが主人では無い。だがその容貌は初対面の人物に恐怖を与えるだろう強面、俺より大きな体格。今その顔はなんだか複雑な心情を見せているあまりこの人はこう言った面は見せないが――

「坊ちゃん…ええと…社長が――」

「ナニ！？またあの人は…ったく。わかりました」

『よう、ジユウ防お前の愛するグレートマザー、智代子ちゃんだ。

直ぐにHOUSEOFFじゃくに来なさいお前の大好きなアップルパイとココアを頼んで有るから。それと学校には常に話をつけてある、単位取れてんのは知ってんのよ？ウシシシシシ！！』

我が祖母のにしてこの女主人、叢雲智代子

である……くつババ様貴女って人は。

アヘメント

こう突拍子も無く到来するのは慣れているし今日はこれといって特別な事が学校に在るわけでは無く、俺は行きつけの喫茶店に行く事と会いになった。

聖なる夜の記憶（後書き）

ここが可笑しいぞ fuck boy と思ったら奮って感想を！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0735z/>

IS-BADAss SOUL

2011年12月2日20時54分発行